

2025年度 薬学部 薬学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

薬学部では大学の卒業認定・学位授与の方針（DP：ディプロマ・ポリシー）や教育課程編成・実施の方針（CP：カリキュラム・ポリシー）を踏まえた全学科共通の項目に加え、薬学部のDPやCPを踏まえた項目を追加しアンケート調査を実施した。

〔1〕 本学の教育内容や設備、学修支援に対する満足度（学科間の比較）

1. 大学全般を総合的に判断して

「とても満足」と「やや満足」を合わせると、大学全体では88.5%に対して本学科では86.2%であった。大学内で標準的な満足度にあると考えられた。

2. 学科・コースの教員による指導・相談

「とても満足」と「やや満足」を合わせると、大学全体では90.2%に対して本学科では90.0%であった。大学内で標準的な指導・相談体制にあると考えられた。

〔2〕 全学科共通項目

1. 本学の「目標とする力」がどの程度身に付いたか

「人間愛（利他の心）」、「他者と協働する力」、「自立して逞しく生きる力」、「創造的な問題解決能力」、「専門性を高める意欲と力」、「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」について、「十分身に付いた」と「やや身に付いた」を合わせると学科全体としては大学全体とほぼ同程度の80～90%であり、大学内の標準的な指導が行われていると考えられた。

個々に見ていくと、「人間愛（利他の心）」と「創造的な問題解決能力」については、4年生では「十分身に付いた」と「やや身に付いた」を合わせてそれぞれ83%、75%と他の学年に比べてわずかに低い傾向が認められた。しかし、5年生ではそれぞれ96%、91%と高い傾向にあった。また、「専門性を高める意欲と力」については、5年生で「十分身に付いた」と「やや身に付いた」を合わせて96%であり、他学年と比べても高い傾向にあった。

以上のことから、本学の「目標とする力」の修得については、5年生で実施される実務実習が有効に働きかけていることが推察され、教育体制として順調に行われていると考えられた。

2. 2025年度の授業に関連して、以下のことをどのくらいしたか

「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」については、「頻繁にした」と「時々した」を合わせて、5年生では82%、6年生では92%と増加の傾向が見られた。高学年では国家試験に向け学修に励んだ様子が認められた。一方で共用試験の実施される4年生では74%であり1～3年生とあまり変わらず（1年生76%、2年生79%、3年生73%）、学修への向き合い方について低学年での介入をさらに強化する必要があると考えられた。

「就職や資格取得に関わる勉強」については、「頻繁にした」と「時々した」を合わせて、1年生31%、2年生26%、3年生39%、4年生51%、5年生70%、6年生82%と学年が進むにつれて増加の傾向を示しており、学年が進むにつれ就職や資格取得を意識するになっていることが見受けられた。一方で、6年生において18%が「あまりしなかった」もしくは「全くしなかった」としていた。6年生は薬剤師の国家資格取得に向けて日々頑張っていることを考えると、一部の学生は質問の「資格取得」について、薬剤師国家試験以外の資格（例えばネイリスト検定など）を念頭において回答した可能性が考えられる。

「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」については、「頻繁にした」と「時々した」を合わせて、1年生が最大の36%を示し、学科全体では29%であった。大学全体の45%に比べいずれの学年も低いことから、学生と教員との距離が他学科に比べ広がっていると考えられる。2025年度は新カリキュラムが2年生まで進んできた。新カリキュラムの準備とともに旧カリキュラムが同時並行的に行われているなどで教員側に余裕がなくなっていることなどが背景として考えられ、新カリキュラム完成年度までしばらく注視していく必要がある。

勉強場所については、「メディアライブラリーセンター（図書館）」の利用は、「頻繁にした」と「時々した」を合わせて学科全体で59%であったのに対し、「学内の自習用教室等」は同39%と比較的低い傾向にあった。しかしながら、「友人と一緒に勉強」が同60%であったことから、一緒に勉強する場所を確保する上でも学内の自習用教室等の確保は今後必要と考えられた。5・6年生については薬学自習室を用意していることもあり、6年生では58%と他学年に比べて突出して自習用教室等の利用が高い。自習用教室等の確保は学生にとって有用なものと考えられる。

3. 2025年度を平均して授業期間中一日あたりにかけた時間

「学内で過ごす時間」の最頻値が1年生では「8時間以上」（22.3%）であり、4年生以下で最も長かった。「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」について「1～2時間」が最頻値（31.5%）であること、1週間に1回以上の部活動やサークル活動と答えた割合が36%であることを合わせて考えると、部活動やサークル活動によるものと考えられた。部活動やサークル活動が充実した学生生活の一部になっていると考えられる。

6年生についても「学内で過ごす時間」の最頻値が「8時間以上」（24.8%）であり、「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」について「5～6時間」が最頻値（24.8%）であったことから国家試験対策の学修によるものと考えられ、学内での学習環境の充実度を示しているものと考えられる。

「趣味や娯楽の時間（1日あたり）」の最頻値が学科全体では「2～3時間」（29%）である一方、「本（電子書籍含む）を読んだ時間（1週間あたり）」は同「1時間未満」（66%）であった。この傾向は大学全体と同じ（それぞれの最頻値は同じで、割合はそれぞれ25%、64%）であり本学科特有の状況にあるわけではない。余暇の過ごし方の多様化が背景にあることは十分に承知しているが、それでも、より多くの読書機会を持って欲しいと思われる。

4. 2025年度を平均して授業期間中以下のことをした回数

「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数（15回授業を基準にして）」について、「2回以下」が学科全体で85%であり、大学全体の69%と比べて高いことから、授業の出席については比較的良好であると考えられた。

「部活動やサークル活動を行った回数（1週間あたり）」について、「3回以上」が大学

全体で9%であったのに対し、学科全体では4%と低い傾向にあった。また、「なし」については学科全体で79%と、大学全体77%とほぼ同程度であった。学年別に見てみると、1年生64%であったものが4年生では84%と、学年が上がるにつれて増加の傾向にあった。部活動やサークル活動は学年が上がるにつれて難しくなる傾向にあること、その一方で、少ないながら活発に行っている層も一定数いるものと考えられた。部活動やサークル活動については、希望すれば参加できる状況にあると言える。

「アルバイトの回数（1週間あたり）」については、「3回以上」の割合が3年生41%で最も高い傾向にあった。1年生から3年生に上がるにつれて余裕が出てくると、4年生以上では共用試験や実務実習、国家試験対策で忙しくなることによるものと考えられる。

「ボランティア活動の回数（1年間あたり）」は学科全体で「なし」が90%であり、大学全体の76%に比べボランティア活動を行っていない傾向が認められた。その一方で、5年生については「4回以上」が8%と、大学全体4%と比べて多い傾向にある。実務実習先でのボランティア活動やアドバンスセミナーにおける地域医療見学・体験実習をもとに回答した可能性も考えられる。

5. 本学の教育内容や設備、学修支援に対する満足度

「授業の内容」については、「とても満足」と「やや満足」を合わせると学科全体で84%であり、大学全体の86%とほぼ一致しており、大学内で平均的な満足度を与えていると考えられる。「カリキュラム」についても同様に、学科全体84%に対し大学全体88%であり、大学内で平均的な満足度を与えていると考えられる。

「学生生活」についても学科全体87%に対し大学全体88%であり、大学内で平均的な満足度を与えていると考えられる。しかしながら4年生については、79%と他学年に比べて低い傾向にあり、学生生活上何らかの不満がくすぶっているものと考えられる。「講義教室の設備（空調や照明を含む）」、「メディアライブラリーセンター（図書室）の設備や学修環境」、「事前事後学修・課題のための学修スペース」についても4年生は他学年と比べて「とても満足」と「やや満足」を合わせた割合が低い。4年生は共用試験に向けた学修が多いことから、5・6年生の国家試験に向けた対策並みに、自習室の充実など学習環境の整備が必要である可能性が考えられる。

学科全体で見ると、「講義教室の設備（空調や照明を含む）」や「演習室・実習室の設備・器具」、「メディアライブラリーセンター（図書室）の設備や学修環境」、「事前事後学修・課題のための学修スペース」、「保健室や付属の医療施設」、「学生食堂」、「学科・コースの教員による指導・相談」、「事務職員によるサポート」、「就職支援室による進路・就職に関する支援」、「大学全般を総合的に判断して」について、大学全体と同様に8～9割程度が「とても満足」と「やや満足」と回答しており満足度は高いものと考えられる。

6. 不安や悩み

「授業の内容についていけない」については、「大いにある」と「少しある」を合わせると1年生60%、2年生46%、3年生45%、4年生38%、5年生19%、6年生18%と学年が上がるにつれて減少している。低学年のうちに学修方法が身に付いたもしくは進級できなかったものと思われる。2024年度から新カリキュラムが始まり、従来よりも特に1年生で基礎系科目の学修支援が手厚くなった。にもかかわらず授業の内容についていけないと不安を持っている学生が多いことから、1年生の学修対策のより一層の充実が必要と思われる。

「卒業後にやりたいことがみつからない」については、「少しある」と「大いにある」

を合わせて1年生29%、4年生35%であったものが5年生19%、6年生12%と大きく減少した。実務実習や就職活動を経て、将来に向けて展望が開けてきたものと考えられる。

「希望の就職先や進学先へ行けるか」といった不安や悩みについては、「少しある」と「大いにある」を合わせて1年生58%、4年生66%であったものが6年生27%と大幅に低下している。6年生での大幅な低下は就職先等が決定したことによるものと思われる。低学年で不安を持つ学生が4割程度いることから、低学年でのキャリア支援は一定の需要があるものと考えられる。

「経済的に勉強を続けることが難しい」については、「少しある」と「大いにある」を合わせて学科全体で14%であり、大学全体13%とほぼ同程度であった。1割程度の学生が経済的に困っていることから、経済的な支援に関する情報提供の充実などが必要と思われる。

「学内の友人関係に悩みがある」については、「少しある」と「大いにある」を合わせて学科全体で14%であり、大学全体の12%と大きな違いはない。4年生については20%と少し高いものの、5年生では逆に8%と大幅に減少している。実務実習で学外に出ることにより、友人関係の悩みに対する認識に変化が生じているものと思われる。「家族との関係」、「身体面の健康状態」、「精神面の健康状態」についても同様に他学年と比べて4年生に不安や悩みが多く、今年度の4年生に特有のものか、次年度以降も注視する必要がある。

「身体面の健康状態」、「精神面の健康状態」に関する不安や悩みについては、「少しある」と「大いにある」を合わせて学科全体でそれぞれ27%、30%であり、大学全体の18%、20%と比べて高い傾向にある。4年生がそれぞれ32%、40%と比較的多い傾向にあり、カリキュラムが過重になっていないか、学生の身体面や精神面を考慮しつつ検討する必要がある。

以上のような悩みの相談先として、どの学年も大学全体と同様、「学内の友人」や「学外の友人」、「家族」で7～8割を占めており、友人や家族の重要性が伺える。「教職員」については3%程度であり、相談相手としてはあまり必要とされていない。「相談する相手がいない」は学科全体で3%であり、大学全体2%とほぼ同様であり、殆どの学生は相談する相手に困っていない。

7. デジタルツールの利用

「生成AI」については、学科全体では「頻繁に利用している」が21%であるのに対し、「全く利用していない」が11%であり、学生間での利用の実態については大きな開きがあると思われる。大学全体でも同様の傾向を示し、それぞれ21%、8%であった。

「主な利用用途」は学科全体で「情報の収集」が最も多く42%、次に「授業課題やレポートの作成」21%であった。大学全体も同様の傾向を示し、それぞれ39%、23%であった。

「生成AIから出力された結果が正しいか確認している」については、「確認している」と「時々確認している」を合わせて87%であり、多くの学生が確認の必要性を感じている。また、「生成AIの活用は自分の将来に必要なスキル」だと87%の学生が思っている。これらの傾向は大学全体ではそれぞれ82%、85%であり、大学全体と同様の傾向を示していた。

「本学で発行しているオープンバッジ」の認知度については、1年生でも12%、学科全体で9%であり、大学全体16%と比べて低い傾向にあった。また、「就職活動におけるオープンバッジの活用」についても、知っている者の中でさらに約半数が「そう思う（活用した）」であり、活用の意義についても意識が低い傾向がみられた。薬学部は国家資格取得により就職が左右されるため、オープンバッジはあまり必要とされていないと考えられる。

〔3〕薬学部の独自項目

1. 現時点でどのくらい身に付いているか

「責任感と高い倫理観」については、「十分」と「かなり」を合わせて、1年生51%、2年生44%、3年生49%、4年生41%で、4年生まではあまり変化が見られなかったが、5年生63%、6年生68%と上昇がみられた。5年生から学外に実務実習に出て行っていることから、実習の現場でより身に付いたものと考えられる。

「他者との討議を通じて、意見をまとめることができる」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生48%、2年生44%、3年生51%、4年生36%で、4年生まではあまり変化が見られなかったが、5年生56%、6年生61%と上昇がみられた。

「医療や健康に関する問題の気づき」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生46%から6年生66%とおおむね学年が上がるにつれて上昇がみられた。

「専門的な知識や技術を活かした問題解決手段の提案」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生31%から6年生66%とおおむね学年が上がるにつれて上昇がみられた。

「健康上の課題を抱えた人に対する適切な解決策の提案」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生31%から6年生66%とおおむね学年が上がるにつれて上昇がみられた。

「処方箋に基づいた調剤」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生22%と高かったものが、2年生16%とわずかに低下し、3年生24%、4年生58%、5年生76%、6年生70%と上昇がみられた。

「エビデンスに基づいた医薬品情報の収集」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生25%と高かったものが、2年生20%とわずかに低下し、3年生33%、4年生42%、5年生57%、6年生68%と上昇がみられた。

「患者にとって必要な服薬指導の実践」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生21%と高かったものが、2年生16%とわずかに低下し、3年生24%、4年生46%、5年生53%、6年生67%と上昇がみられた。

「地域の人々の健康支援の実践」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生23%と高かったものが、2年生19%とわずかに低下し、3年生27%、4年生33%、5年生45%、6年生63%と上昇がみられた。

「セルフメディケーションの支援」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生22%と高かったものが、2年生20%とわずかに低下し、3年生28%、4年生40%、5年生39%、6年生67%と上昇がみられた。

「英語で書かれた資料の勉強や研究への活用」については、「十分」と「かなり」を合わせて1年生17%、2年生16%、3年生15%、4年生16%であったものが、5年生20%、6年生37%と上昇がみられた。5・6年生は卒業研究で英語の文献を読んでいることが、上昇に貢献したものと思われる。

以上のことから、薬剤師業務における多くの実践項目について、学年が上がるにつれて身に付いていることが窺える。

2. 現時点でどのくらい意欲があるか

「地域住民の健康維持増進への貢献」については、「大いにある」と「かなりある」を合わせて1年生43%、2年生38%、3年生40%、4年生37%と4年生までは変化はほとんど見られないものの、5年生60%、6年生70%と上昇がみられた。

「多職種連携の実践」については、「大いにある」と「かなりある」を合わせて1年生53%、2年生49%、3年生52%、4年生42%と4年生までは変化はほとんど見られないものの、5年生68%、6年生74%と上昇がみられた。

「患者のQOL向上」については、「大いにある」と「かなりある」を合わせて1年生59%、2年生63%、3年生66%、4年生57%と4年生までは変化はほとんど見られないものの、5年生77%、6年生79%と上昇がみられた。

「患者の薬物療法に責任を持ち経時的に関わる」については、「大いにある」と「かなりある」を合わせて1年生56%、2年生58%、3年生61%、4年生49%と4年生までは変化はほとんど見られないものの、5年生72%、6年生79%と上昇がみられた。

「生涯にわたる情報収集や研鑽」については、「大いにある」と「かなりある」を合わせて1年生46%、2年生51%、3年生49%、4年生43%と4年生までは変化はほとんど見られないものの、5年生65%、6年生73%と上昇がみられた。

以上のことから、薬剤師に関連する業務への意欲については入学時点から半数程度がかなり意欲を持っており、実務実習を経験してからさらにその意欲が高まることが窺える。

3. もっと学ぶ必要のある科目

「一般教養科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で74%、最多は1年生～3年生77%、最少は4年生で69%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、7割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「物理系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で75%、最多は1年生82%、最少は3年生で71%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、7割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「化学系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で84%、最多は1年生89%、最少は4年生で77%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、8割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「生物系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で84%、最多は1年生88%、最少は4年生で79%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、8割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「薬理系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で87%、最多は2年生91%、最少は6年生で83%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、9割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「薬剤系（製剤、薬物動態）科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で86%、最多は5年生89%、最少は1年生で83%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、9割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「病態・薬物治療系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で86%、最多は5年生90%、最少は6年生で81%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、9割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「医薬品情報・EBM」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で82%、最多は3年生86%、最少は6年生で78%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、8割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「衛生薬学系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で81%、最多は2年生84%、最少は4年生で78%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、8割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「倫理・コミュニケーション系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で71%、最多は2年生78%、最少は4年生で63%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、7割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「法規・制度系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で73%、最多は3年生と6年生75%、最少は1年生で71%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、7割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「臨床系科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で82%、最多は3年生86%、最少は1年生で79%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、8割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

「上記以外の科目」については、「とても思う」と「やや思う」を合わせて学科全体で60%、最多は6年生67%、最少は3年生で55%となっており、学年間で変化はほとんど見られず、6割の学生がもっと学ぶ必要があると思っている。

以上のことから、いずれの授業科目についても在学中を通じて6～8割の学生が、もっと学ぶ必要性を感じていることが窺える。

一方で、学修しにくいと感じている領域として、学科全体でみると物理系科目(22.6%)、化学系科目(14.7%)、薬剤系(製剤、薬物動態)科目(10.7%)があげられる。いずれの科目も学年間でその割合は大きくは変化していない。学びの必要性を感じているものの、学修のしにくさを6年生まで引きずっており、学修に苦勞していることを窺わせる。薬剤師になって現場で働く際には基礎科目よりも専門科目が重要となってくる。薬剤系(製剤、薬物動態)科目などの専門科目については、履修の際に学修しにくさを感じさせないような工夫がより一層求められていると思われる。

〔4〕まとめ

全学科共通の項目については、薬学科全体でみると大学全体と比較し大きく問題となる点は認められなかった。しかしながら、学年間で比較するといくつか問題点がみられた。

「2025年度の授業に関連」したことについてみると、1年生については、「授業の内容についていけない」不安や悩みについて「大いにある」と「少しある」を合わせて60%が回答している。2024年度から新カリキュラムが始まり、従来よりも特に1年生で基礎系科目の学修支援が手厚くなった。にもかかわらず授業の内容についていけないと不安を持っている学生が多いことから、1年生の学修対策のより一層の充実が必要と思われる。4年生については、「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」が、1～3年生と比較して「頻繁にした」と「時々した」割合がそれほど変化していなかった。4年生は実務実習に出るための共用試験のある学年であることから、学修への向き合い方についてさらに介入する必要があると考えられた。一方、教員側の問題点としては、「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」について、「頻繁にした」と「時々した」を合わせて、大学全体と比べいずれの学年も低いことから、学生と教員との距離が他学科に比べ広がっていると考えられた。2025年度は新カリキュラムが2年生まで進んできた。新カリキュラムの準備とともに旧カリキュラムが同時並行的に行われているなどで教員側に余裕がなくなっていることなどが背景として考えられ、新カリキュラム完成年度までしばらく注視していく必要がある。

キャリア支援についても学年間で比較すると、「卒業後にやりたいことがみつからない」、「希望の就職先や進学先へ行けるか不安」について5・6年生に比べて低学年で「不安や悩み」が大きいことから、低学年におけるキャリア支援について一定の需要があるものと考えられた。

薬学部独自の項目についても大きく問題となる点は認められなかった。薬剤師業務における多くの実践項目について、学年が上がるにつれて身に付けることができるようになったことが窺えた。薬剤師関連する業務への意欲については入学時点から半数程度がかなり意欲を持っており、実務実習を経験してからさらにその意欲が高まったことが窺えた。

もっと学ぶ必要性についても、いずれの授業科目についても在学中を通じて6～8割の学生が感じていることが窺えた。一方で、学修しにくいと感じている領域として、学科全体でみると物理系科目（22.6%）、化学系科目（14.7%）、薬剤系（製剤、薬物動態）科目（10.7%）があげられる。いずれの科目も学年間でその割合は大きくは変化していない。学びの必要性を感じているものの、学修のしにくさを6年生まで引きずっており、学修に苦勞していることを窺わせる。薬剤師になって現場で働く際には基礎科目よりも専門科目が重要となってくる。薬剤系（製剤、薬物動態）科目などの専門科目については、履修の際に学修しにくさを感じさせないような工夫がより一層求められていると思われる。

以上の結果を、今後の教育課程の編成・実施の方針の策定や、授業改善に活用していきたいと考えている。